

~~~~~  
論 説  
~~~~~

## 東京周辺の国フェスにおける言語政策的営為の エスノグラフィー<sup>1)</sup>

猿 橋 順 子\*

### 1. はじめに

週末になると、代々木公園（東京都渋谷区）や日比谷公園（東京都千代田区）では、ベトナムフェスティバルやブラジルフェスティバルのように、国名を冠した催し物（国フェス）が開催される。名称や内容、開催に至った経緯、実行委員会の構成員など、どれを取ってもそれぞれの独自性が見られる。一方で、全体として類似の催しという印象も受ける。同一の場で開催されていることに加え、運営者や参加者の相互参照や相互参加が手伝ってか、その類似性は年を追うごとに増しているようにも見える。

規模もさまざまな国フェスの数を統計的に把握することは困難だが、グローバル化に伴い、増加および拡張化傾向にあると見える。その背景には社会や文化のイベント化（茶谷 2003; 永井 2016）や文化消費の高まりに伴う文化の商品化（Bennet et al. 2014）なども密接に関係していると考えられる。社会言語学にも、言語文化圏の交錯や接触場面の凝集的な実践場と言え、興味深い。

国フェスには様々な社会言語学上の研究課題が見出しうる。不特定多数の人々が時限的に集まる国フェスにおいて、効果的な情報伝達という意味においても、

---

\* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 本論は2017年8月にカナダ、トロント大学で開催された Multidisciplinary Approaches in Language Policy & Planning Conference (LPP2017) における口頭発表を基調に加筆修正したものである。また、本研究は JSPS 科研基盤研究 (C) 「多言語公共空間の形成とコミュニケーション秩序」(16K02698) の助成を受けた研究成果の一部である。

外国や外来の文化を演出するという意味においても、言語や文字、媒体、表現の選択をめぐる事前の計画・準備、当日の即興的な調整・対応とあらゆる言語政策的な営為が関係していると類推される。他方で、経験的なデータ収集に基づく調査研究は、管見の限り蓄積があまりない。そこで本論では、国フェスの場で展開される言語政策的営為を見ていくこととする。

## 2. 国フェスとは何か

本論では、公園や広場などの公共空間で開催される、外国やその国を代表する地域・文化を主題としたお祭りやイベントを国フェスとし<sup>2)</sup>、分析の対象とする。外国や外来の文化を祝祭する営みは古くから、移民の歴史と共にあったと言って良いだろう。

移民の祭りとは国フェスの相違点について猿橋(2016)は、土着の祭りと移民の祭りの比較研究である飯田(2002)を参照して検討した。集住地域で開催される移民の祭りと、大型公園といった公共場で行われる国フェスでは「地域性」の面で大きな違いが認められ、それは誰にとっての催しなのかという「公開性」の違いにもつながる。そして、これらの新しい営みを可能にしているのがデジタルメディアである(猿橋 2016, 2018)。

従来からある移民の祭りは、移民の暮らしから生まれる。一方で、集住地域と切り離された所で開催される国フェスは、枠組みが作られ、出演者、出店者、ボランティア、参加者等を広く募ることで成立する。また、日本で様々な国のフェスティバルが開催されるのと同様に、世界各地でもジャパン・フェスティバルが開催されている。すなわち、国フェスはトランスナショナルな広がりを見せている(e.g. Goldstein-Gidoni 2005)。翻ると、枠組みの共有や模倣が類似のイベントを拡張させているとも考えられる。これらの点から国フェスは、移

---

2) ロックフェスを事例とした社会学の研究で永井(2016)は、対象とする営みの顕著な多様性に触れ、「厳格な定義を急ぐこと」は定義を巡る「議論の泥沼化」に陥りかねず、「対象のおもしろさを減じてしまう」危険性があると指摘している(永井 2016, p. 7)。この指摘に沿い、本稿でも国フェスを「公共空間で開催される外国をテーマとした催し」と大枠を設定するに留めることとする。

民の祭りからの発展過程といった通時的な視座だけではなく、フェス文化やグローバル化といった観点から共時的・横断的な調査研究の意義が認められよう。本稿は、後者の視点に立って、国フェス研究に共時的・横断的に取り組むものである。以下に、国フェスに共通する特徴を挙げ、国フェスを研究対象とすることの意義と併せて論じていきたい。

第一に、国フェスは文化移動の実践と言え、文化移動を促進させたり、制限させたりする要素は何なのかを探求することができる。人と物の移動が活発なグローバル化社会では、文化の移動そのものが主要な研究課題となっている(Blommeart 2010; Scollon & Scollon 2003; Inda & Rosald 2008; Goldstein-Gidoni 2005)。国フェスでは、伝統文化の継承や異なる文化の混淆、新しい文化の創造などが、実践と説明を伴って披露される。各々の土地で培われた文化資本<sup>3)</sup>が持ち込まれ、文化的価値として提示され、変容の可能性を発見する場ともなる。つまり、文化の変容や本質化、それに対する人々の思い入れや葛藤などのディスコースが確認される(Bhaba 1994; Rubdy & Alsagoff 2014)。国フェスは、文化の移動をめぐる実践とディスコースを凝集的に観察できる場のひとつといえよう。

第二に、国フェスには、草の根から興る活動と、政策からの関与の双方が確認されることに加え、幅広い参加者が確認される。国フェスは、発信国のソフトパワー戦略(Nye 2004)や国家ブランド化戦略(Anholt 2007; Aronczyk 2008)とも無縁ではない。ただし、日本政府のクールジャパン戦略(内閣府知的財産戦略推進事務局 2018)において、世界各地にすでにある民間主導の催しに政府が参画していこうとする流れがあることから、国フェスの全てを国家のソフトパワーや、国家ブランド化の文脈で見るとは妥当ではない。

多くの国フェスは、個人の思いや、小さな組織、民間レベルの取り組みから

---

3) Bourdieu (1986) は文化資本について、人が家庭や社会の中で無自覚のうちに継承し、育む文化実践と捉えた。文化資本は高等文化から生活文化までを広く含むが、社会階層を生み出したり固定化させたりする一面もある。別の国に文化実践を移転させようとする国フェスでは、高等文化が目されやすいが、他にも文化価値になり得るものがあることを発見する場としての可能性も秘めていると言えよう。

始まり、継続されている。個々の国フェスは立場や分野を超えた人々の関与で成り立っている。特に、移民や定住外国人は国フェスの重要な担い手である。McDermott (2012) は、都心の公共空間で催される文化祭事が、移民にとって活躍の場を広げ、特に年少者にとっては自身の民族文化的なルーツを確認する貴重な機会となることを指摘している。一方で、こうした文化イベントが移民の外来性を膠着させるとして批判的な指摘もある (Park 2011)。国フェスが移民のエンパワメントに寄与するのか、それとも周縁化に加担するものとなるか、はたまた周縁性を是正する契機となるかは、その内容次第であると考えられ、丁寧な観察や聞き取りに基づいた調査が求められる。

国フェスの参加者には、さらなる多様性が認められる。国フェスには、大臣や大使など政府の要職に就く人から、一般の人まで来場する。統計資料があるわけではないが、国フェスの場は、その国の出身者と日本人だけではなく、様々な国の人々が集まっているという印象を受ける。それは、定住外国人や留学生は同国人とだけではなく、「外国人」としての国際的な交友関係を持っていることと関連している。彼らの間で国フェスの情報が共有されたり、互いの国フェスに行き来することが慣例となっていたりするのである。舞台上で演目を披露するのは、国を代表するプロの演者から、趣味としてその分野に参加し始めた初心者までが含まれる。ブースには、人が暮らしていく上で基本となる医療や保健衛生、教育などを支援する NGO から、高級リゾート地に観光客を誘致する企業までが軒を連ねる。毎年、国フェスを一大行事としている人から、その日偶然に通りにかかった人までが場を共にする。このように、社会的地位、国籍、文化的営為の熟達度、業種、思い入れのいずれの面においても、幅のある人々が一堂に会する。多様な参加者という特徴が国フェスに共通して見られるのである。

第三に、国フェスは一見、多様性が顕著で、混沌とした場という印象を抱くこともあるが、秩序を生み出す力動や指標が認められる。たとえば、政府関係者の多くは祭りの場には似つかわしくないスーツ姿で来場する。要人を中心に、スーツ姿の数人の集団がまとまって移動する様子は、祭りそのものを楽しんで

いる人々とは明らかに識別可能である。服装に加え、目的地に向かって真っ直ぐに歩く様子からも、何が陳列されているのかを散策しながら歩いている参加者とは区別される。このように、あらゆる言語・非言語の手がかりが記号的な指標となって、国フェス場に一定の共通了解や秩序を作り出していると見ることができ。そこで、このような公共空間で何が、どのような指標となって、国フェスというひとつのイベントをまとまりのあるものにしていくのかといったことは、加速するグローバル化社会（Vertovec 2007）における秩序形成を探索する上で示唆を与えるところとなるであろう。

第四に、本節の冒頭でも述べたが、こうした国フェスを実現可能にさせている背景に、デジタルメディアの存在がある。デジタルメディアの存在により、様々な背景の人々と、様々なジャンルのモノ・コトを一時に一堂に凝集させることが可能になっている。国フェスを横断的に見ていく上で、デジタルメディアの活用のものであることも、重要な側面であると言える。

### 3. 国フェスと言語

前節では、国フェスを緩やかに定義付けた上で、国フェスを横断的に見る意義について、文化移動、参加者の多様性、秩序形成、デジタルメディアの四点から論じた。本節では、これら四つの特徴と関連付け、社会言語学的な研究課題を論じる。

第一点の文化移動については、国フェスが、開催地とは異なる言語で実践が蓄積されているモノやコトを持ち込む場であることから、言語や文字・表記の選択、翻訳・通訳の活用、その他の表現上の工夫が注目される。楽器演奏や舞踊などでは、演技そのものに言語が介在しない場合もあるが、歌や劇などは言語がその一部となる。コンサートホールなら字幕をつける選択もあるが、野外の特設ステージではそのような設備を確保できるとは限らない。元々の言語を選択すれば、その国の出身者にとっては文化そのものを楽しんだり、望郷の想いに耽る機会となる。しかし、その言語を解さない人にとっては、内容や物語の筋が伝わらなくなってしまう。とは言え、他の言語に翻訳すると、意味は伝

達されるが、その国らしさは削がれる。何語に置き換えるのかという言語選択に加え、翻訳という新たな文化実践が加えられることにもなる。このように、演目内においても、演目についての紹介や説明の場面においても、言語選択や翻訳・通訳、表現の検討が必要になる。こうした文化移動・接触・混淆の諸場面に、言語がどのように介在しているのか、それを決定するのは誰で、何を重視したからなのか、そうした一連の行為によって達成されるものは何なのかを探究していくことは、社会言語学的な関心課題となる。

第二点の参加者の多様性は、上記の問題をさらに複雑にする。言語選択は、その祭りや演目が誰に向けられているのかを露呈する。国フェスが日本語で溢れていたり、その国の言語が装飾や象徴のためにしか用いられていなければ、そこは日本人のために作られた場という印象を生み出すだろう。その国の言葉ばかりが行き交っていれば、日本語話者は疎外感を感じたり、場合によっては脅威と映るかもしれない。加えて、前節で述べたように、国フェスの場は、その国の出身者と日本人だけではなく、様々な国籍と文化背景を持つ人々が集う場になっている。そこでは、フェス対象となっている国の言語と日本語の間の選択だけではなく、対象国の近隣の言語や共通言語（たとえば英語）なども行き交う。誰に伝えるために、どの言語を用いるのか、何を演出するために、どの表現を用いるのか、などの選択は、国フェスの方針を露呈する大事な要素となる。言語の伝達機能と象徴機能といった社会言語学の視点を用いたアプローチにより、将来的な国フェスへのヒントが提供可能である。

第三点の国フェス場に見られる秩序の形成において、言語がどのように介在するかを探究することは、多言語化する公共空間の特性を把握し、将来的な言語政策のありようを考える上で示唆を得ることが期待される。個々の国フェスは、年に一度の週末に、誰もが出入りできる公共空間で行われる。主催者は、その場にまとまりや一体感を生み出そうと様々な工夫を凝らす。そのような工夫によるものとは別に、国フェスでは参加者どうしが互いに参照しあうことで生まれる秩序が認められる。計画的なものであれ、即興的なものであれ、直接的なものであれ、間接的なものであれ、場の秩序形成には言語および非言語の

記号が無数に関与する。一例を挙げれば、舞台上の人が「みなさん、こんにちは、シンチャオ！（ベトナム語でこんにちは）」と呼びかければ、観客席からは（「こんにちは」ではなく）「シンチャオ！」という呼応が生まれる。言葉は発しなくても、演目後の演者の深々としたお辞儀は観客席からの拍手を促す。前者は催しの始まり、後者は終わりの合図となり、席の入れ替えが円滑に行われる。言語化されなくても相互理解につながる行動と、言語化なしでは誤解や想定外の反応が生じる行動、言語と非言語が相互補完する場面の観察に基づく抽出は、多言語・多文化化する社会の秩序形成を探究する上で重要な示唆を与える。そこから得られた知見は言語政策の立案や実施に役立つことも期待される。

上記三点のいずれとも関連して、第四点のデジタルメディアの存在がある。週末限定で作り出される国フェス場に認められる秩序は、その場に居合わせた人々で即興的に作り上げられているように見えたとしても、前年の国フェスでの経験や、デジタルメディアを介して作り上げられたものであることもある。特に、イベントの公式ホームページや、SNS上で共有、拡散される情報は、一度も経験を共有したことがない人々の間に、共通の前提や認識を広める上で有効である。公共空間に「外国・異文化」を凝集させる国フェスは、翻るとデジタルメディアが可能にさせていると言っても過言ではないだろう。国フェスの場での言語選択や、通訳・翻訳などの言語間の橋渡しは、インターネット上のデジタルフェス場ですでに定着している可能性もある（猿橋 2018）。国フェスの言語使用や言語選択は、物理的な国フェスの会場だけではなく、デジタルメディア上での言語使用や相互作用も併せて見ていく必要がある。

このように、国フェスにおける言語使用や言語選択の様相を探索することは、加速するグローバル化社会における文化移動や接触、混淆のありよう、人々の参画、秩序形成において言語がどのように介在するかを探究することにつながる。付随して、国家（表象）と言語の関係や、参加者のアイデンティティ構築などにも迫ることが可能と考えられる。

#### 4. 言語政策的営為

これまで、国フェスの営みを共時的・横断的に探究することと、その社会言語学的な意義を論じてきた。社会言語学と言っても幅広く、様々なアプローチが考えられる。国フェスには、言語や表記の事前の選択、実践を通しての修正や調整といったプロセスが認められること、他者の言語イメージや言語学習動機に働きかけるような実践が広く認められることから、言語政策研究の概念、枠組みの援用可能性が認められる。言語政策と言うと国家や行政が主導するトップダウンの政策が想起されがちである。しかし、近年の言語政策研究では、個人や組織の言語使用や言語をめぐるイメージや価値観（言語イデオロギー）に影響を与えようとする意図的な行為を総称することが提唱されている。本節では、その経緯を概観し、国フェスの営みを探究する上で、言語政策研究の枠組みを援用することの親和性を確認していく。

人々が組織的に行う、言語に関する意思決定や調整を表す術語はいくつかある。主なものとして、言語政策 (language policy) と言語計画 (language planning) があるが、前者は全体的な方向性や目的を示す用語として、後者は前者を実現するための具体的かつ領域毎の方策として区別されることもある。専門家として言語の整備に関与してきた言語学者の間では、言語計画の用語がより一般的に用いられてきた (Spolsky 2012)。一方で、言語に関する意思決定や調整は、本来、言語のために行われるのではない。関係性構築や相互理解、知の保存・継承、共同体意識の形成など、言語以外の社会的な目的のために求められる。こうした目的を達成するために言語的な下位目標、すなわち表記法や標準化、辞書編纂、教授法などが検討される。つまり、言語目標はその基となる社会的な目標を見失ってははいけなし、そもそも両者は密接に結びついている。実際に多くの言語をめぐる社会実践が、両者を区別せずに取り組まれている。これらの点から、両者は区別されるべきでないとの主張もある (Johnson 2013)。

また、言語政策は、17世紀以降、国民国家イデオロギー滋養のために国家主導で取り組まれた一連の地位計画、コーパス計画、普及計画を議論する際に用いられてきたことから、デフォルトで国家による政策や計画を表す用語として



用いられる傾向がある (Wright 2016)。それに対し, Cooper (1989) は言語計画を国家に限らず, 組織から個人レベルまでの取り組みを含め「他者の言語コードの獲得, 構造, 機能的配置に関わる態度に影響を与える意図的な努力」(p. 45) と定義付けた。このように言語政策の範疇を修正することで, Cooper (1989) は社会変容を説明し, 社会変容によって説明される言語計画研究の道を開いた。いわば, 言語政策研究を社会科学の一部に位置づけたのである。

この, 言語計画の主体を国家に限定しないとする提案以降, 言語政策研究の裾野は大きく広がった。意識や程度の差はあれ, いかなる組織も言語政策的な営為を行っているとする考え方は, 国家による言語政策がうまくいかない状況において, その理由の探究に新しい分析の視点を与える (Spolsky 2009)。経験的にはいかなる組織も持っている言語政策的発想や営為を顕在化させたり, 意識化させる作用も生み出す。組織や個人は, 国家の言語政策に翻弄されるだけの存在ではなく, 自らも主体的に合目的に言語政策的判断や努力を考え, 実践することができるという発想の転換を促す。

こうした言語政策の捉え方の転換は, 言語政策研究の方法論にも影響を与えている。これまで公文書のアーカイブ研究や政策立案者を対象とした専門家インタビューなどが中心であったが, 様々な組織における言語および言語使用に対する態度や調整行動の相互作用, 構成員にとっての意味づけなどに接近しようとするエスノグラフィックなアプローチが提案されている (Hult & Johnson 2015)。

国フェスにおける言語選択や表記選択も, それ自体の社会的な意味に加え, それによって何を達成しているのか/しうるのか, といった言語政策的営為の社会实践としての意味に迫る意義がある。また, 国フェスは新しい営みであり, 伝統や前例, 慣例に縛られていない。デジタルメディアなど新しい媒体に支えられて実現している営みであるという点においても, 国フェスの実践における言語政策的営為を探究していくことが, グローバル化する多言語公共空間における言語政策・言語管理を探求することにつながると思われる。なお本稿では, 本節で見えてきた言語政策研究の流れを汲み, 他者あるいは組織の言語使用, 言

語獲得、言語に対する価値観への働きかけと、それに関連するあらゆるディスコースを含めて言語政策的営為と総称し、議論を進めることとする。

## 5. 本論の問題意識と研究設問

本論では、国フェスにおいてエスノグラフィックなフィールド調査を通して、言語がどのように選択され、管理され、演出され、表象とされているかについて接近しようと試みる。すなわち、東京周辺で開催される国フェスにおいて言語政策的営みがどのように認められるかを探究することを目的とする。

国フェスにおける言語政策上の研究課題は様々に設定できる。第一に、言語の地位への影響がある。移民の言語は、送り出し国と受け入れ国の関係にもよるが、一般的に受け入れ国では言語の地位が低いままに据え置かれる傾向にある。その言語が送り出し国の国語や公用語でない場合にはなおさらである。国フェスには、移民の言語の使用域を顕在化させ、結果的に移民の言語へホスト社会の気付きを高める可能性が期待される (McDermott 2012)。たとえば、国フェスでは移民の文脈とは逆転した主客関係が見られる。当該国出身者が日本人を招待したり、接遇する場面などである。そこに、日本語と当該国の言語の地位関係の逆転が期待される。あるいは、実際には関係性における主客関係の逆転が見られるにもかかわらず、言語に関しては引き続き日本語が主導的な地位を占めることが観察されうるかもしれない。とするならば、国名を掲げながら、その国の言語が活動域を持つことを妨げるものは何かということを明らかにしていくことが可能になる。いずれにしても、移民の言語が弱い立場に置かれる背景や、その力関係を修正する手がかりが探究できる。

第二に、国フェスは異なる言語どうし、話者どうしが出会う接触場面の宝庫となる。開催地の人々にとって馴染みのない概念や物品を紹介するとき、言語表現の工夫や調整、創造を確認することができる。即興的な言語コミュニケーション上の調整や管理が、参加者個々の相互作用においてだけでなく、舞台上などの、いわば公的な場でも展開される。そこでは異なる言語や言語文化についての認識や気付き、すなわちメタコミュニケーションが言語化されて表現さ

れることもある。ここで得られる知見は国フェスという特定の社会領域における言語政策的営為の諸事例であるが、様々な言語の話者が行き来するグローバル社会における言語コミュニケーション秩序形成を探究する手がかりとなろう。

言語は、コミュニケーションの媒体としてだけではなく、象徴的な働きも担う (Wright 2016)。特に国フェスでは、言語の情報伝達機能だけではなく、その国を象徴する働きも重視されていることが予見される。そうした実践を通して、言語間に相対的な関係性が生まれ、言語の地位に影響を及ぼすと考えられる。言語の位置づけや言語選択を管理する態度や方針は、言語政策の多くがそうであるように、明文化されないままに人々の相互理解を模索しながら経験的に蓄積されている段階にあると考えられる。本論は、こうした言語に関連する相互行為プロセスを言語政策的営為と位置づけ、その描出を目的とする。

## 6. 調査方法

調査は、まず、インターネットや在日外国人コミュニティ、留学生からのヒアリングを通して首都圏で開催される国フェスの情報を収集した。多くの国フェスは公式サイトや公式 SNS を運営しており、そこでフェスティバルの主催者、趣旨、内容などについて情報収集と整理を行った。特徴や日程を鑑みて、参加する国フェスを選定した (表 1)。参加にあたっては、実行委員会に調査の意図と趣旨を伝え、一般参加者に認められている範囲で聞き取りや撮影、録画を行うことを伝えた。

事前に国フェス公式 HP で得た情報に基づきつつ、それらに縛られすぎないように一般参加者の流れや盛り上がりに沿って、興味深いと感じた現象は立ち止まって観察した。観察や聞き取りで得られた情報は、佐藤 (2006) を参照してフィールドノートにまとめた。

調査を通して、つながりが生まれたり、研究課題の着想を得た国フェスには翌年も調査を継続させている。国フェスの全容から言っても、個々の国フェス内での調査においても、多くのことが同時に起こっており、その関連性は極めて複雑である。調査者は一時にひとつの場所にいることしか出来ないため、観

表1 調査地一覧

ID	フェスティバル名	開催日	場所
1	第7回日韓交流おまつり	2015年9月26日27日	日比谷公園
2	第3回ミャンマー祭り 第4回ミャンマー祭り	2015年11月28日29日 2016年11月26日27日	増上寺
3	第2回カンボジアフェスティバル 第3回カンボジアフェスティバル	2016年5月7日8日 2017年5月3日4日	代々木公園
4	第8回ベトナムフェスティバル 第9回ベトナムフェスティバル 第10回ベトナムフェスティバル	2016年6月11日12日 2017年6月10日11日 2018年5月19日20日	代々木公園
5	第3回コートジボワール日本友好 Day アフリカンフェスティバル	2016年6月25日26日	代々木公園
6	第11回ブラジルフェスティバル	2016年7月16日17日	代々木公園
7	(第1回)台湾フェスティバル 第2回台湾フェスティバル	2016年7月30日31日 2017年7月29日30日	代々木公園
8	One Love Jamaica Festival (2004～)	2016年8月6日7日	日比谷公園
9	(第1回)アラビアンフェスティバル	2016年9月10日11日	代々木公園
10	第24回ナマステインディア	2016年9月24日25日	代々木公園
11	第14回ディワリインヨコハマ	2016年10月15日16日	山下公園
12	第2回ベトナムフェスタ in 神奈川	2016年10月29日30日	神奈川県庁
13	アイラブアイルランドフェスティバル (2014～)	2017年3月18日19日 2018年3月17日18日	代々木公園
14	第7回ラオスフェスティバル	2017年5月27日28日	代々木公園
15	美味しいベルー	2017年7月29日30日	代々木公園

察した事象の選定は、たとえば「一般参加者の流れに沿うように心がける」といった指針を設けたとしても、恣意性を完全に排除することはできない。こうした限界もエスノグラフィックな調査には付随していることを付記しておく。

## 7. 国フェスの言語政策的営為

国フェスの場、あるいは運営会議等の公用語や作業言語などについて、言語

規定を明文化している国フェスは確認できなかった。しかし、このことをして国フェスに組織的な言語政策がないとは言えない。たとえば、公式ホームページに何語をどのように用意しているかは、その国フェスが言語をどのように位置づけているかを表している。

調査を通して、見出し得た言語政策的営為を領域に分けて整理したところ、①公式ホームページの言語選択・言語設定、②企画・運営段階で重視・尊重される言語能力、③舞台上での言語選択、通訳の配置などの言語管理（猿橋2017）、④出店ブースでの言語関連活動、⑤国フェス全体の言語景観に見る言語地位、となった。本論では紙幅の関係から、デジタルメディアに関連が深い①と、実際のフェス場での調査に基づく④を紹介し、比較考察する。

## 7.1 公式ホームページの言語選択・言語設定

今回の調査事例で、言語別にホームページを用意している国フェスは15件のうち8件であった（表2「言語別頁」）。

三言語が1件（カンボジアフェスティバル）で、二言語が7件であった。複数言語が用意されているものは全て日本語を含んでいる。日本語以外の言語については英語が4件、英語以外が5件（クメール語、韓国語、ベトナム語、ポルトガル語（ブラジル）、スペイン語（ペルー））である。言語選択の表示方法は3種認められた。国旗が4件、当該言語で記載が3件、英語記載が1件であった。国旗表示については、ベトナム、ブラジル、ペルー、アイルランドの国旗をクリックすることで、それぞれベトナム語、ポルトガル語、スペイン語、英語のページに切り替わる。そして、複数の言語が用意されている場合、開催地の言語である日本語に加え、その国や地域を代表する言語がひとつ選ばれる傾向にあり、英語は選択されやすい。インド、アイルランドは複数の公用語の中から英語のみが選択されている。

ただし、言語別にページが用意されていることと、言語別の情報は必ずしも連動していない。言語別のページが用意されていても、当該国の言語のページには情報がほとんど掲載・更新されていない場合もある。タイトルだけが当

表 2 公式 HP の言語設定

ID	フェス名	言語別頁	言語の種類	表示方法	メモ
3	カンボジア	有	1.ク 2.英 3.日	当該言語	
1	日韓	有	日・韓	英語	
4	ベトナム(東京)	有	日・ベ	国旗	
6	ブラジル	有	日・ポ	国旗	
15	ペルー	有	日・西	国旗	画像が主, 情報量少
10	インド(東京)	有	日・英	当該言語	
13	アイルランド	有	日・英	国旗	
14	ラオス	有	日・英	当該言語	英語はトップページのみ
5	コートジボワール →アフリカ	無	日・英		情報量少, SNSを活用 2017 まで言語別
8	ジャマイカ	無	1.日 2.英		画像が主, 情報量少
7	台湾	無	日・(中・英)		限定的に中国語(装飾), 英語(バナーのみ)
12	ベトナム(神奈川)	無	日・(ベ)		限定的にベトナム語(代表者挨拶)
11	インド(横浜)	無	日		公式 SNS は英語が主
2	ミャンマー	無	日		
9	アラビア	無	日		

\* 設定言語数の多い順序に並べた。フェス名は略してある。個々のフェス概要については ID で識別し表 1 も参照のこと。

\*\* 言語の種類は固定した掲載順序が認められる場合のみ、番号を付している。括弧内は限定的な記載のみ認められる言語。

該国の言語で、記事は日本語のものがそのまま掲載されている事例もあり、日本語に情報が偏る傾向が認められる。それでも、ホームページの上部に言語選択ができるようになっていることは、それらの言語を等しく位置づけようとし

た態度の表れであろうから、そこには言語政策上の理想と実践の乖離の問題が潜んでいることが窺える。

また、言語別にページが切り分けられていなくとも、複数言語で掲載されている国フェスが4件あったが、その中には、ほぼ日本語読者を想定しており、対象となっている国の言語は装飾的に用いられているものから(7. 台湾フェスタ)、常に日英語が併記され、両方の読み手を想定してるもの(8. ジャマイカ)、複数の言語がページ内で併用され、混在しているもの(5. アフリカ)と特徴に差が認められた。このことから、言語別のページを用意することと、それぞれの言語での情報の量や質が確保されることとは連動していないことが確認される。言語別にページを切り分けていないことは、必ずしも単一言語というわけではない。ページを言語ごとに切り分けてしまうことで、一方の言語のページに情報がほとんど掲載されなくなるならば、言語でページを切り分けずに必要と思われる言語を必要な言語で掲載していった方が、情報の共有と複数言語の顕在化において効率的な可能性もある。

言語毎にページを切り分ける二(多)言語使用のホームページに対し、ページ内で複数の言語を併記、混用しながら情報発信をする国フェスのホームページの存在は、トランスランゲージング(Translanguaging; Garcia & Li 2014)の概念に近い実践例に見える。また、公式ホームページは日本語で、SNSは英語とるように、媒体によって言語を使い分けている国フェスもある(11. インド)。さらに、そもそも言語化をせず画像、動画のみを掲載し、イメージの共有だけを試みているホームページも見られた(8. ジャマイカ, 15. ペルー)。イメージに頼り、あえて言語化を避けるホームページの存在は視覚記号論(Visual semiotics; Scollon & Scollon 2003)の実践例に通じる。また短期間で方針の変更も認められる。これらの言語使用・不使用傾向はグローバル化時代のコミュニケーションの有り様として、そのプロセスや情報の量と質の傾向を継続的に、かつ詳しく見ていく余地がある。

## 7.2 出店ブースにおける言語関連活動

事前の募集に応じて決まる出店ブースの顔ぶれも、出店経験、活動領域、当該国との関連度等において様々である。表面的には何のつながりも見出し得ない出店団体が、様々な人的・出来事的なつながりをきっかけに参加しており、その経緯を聞いて回ることも国フェスの面白みのひとつである。

いかなる活動も言語と無縁ではなく、多かれ少なかれ言語への態度表明や他者への促しを含んでいる。ここでは、言語を中心に据えている活動（以下、言語関連活動）について、どのような団体が展開しているかをまとめた（表3）。

言語関連活動を展開するブースが認められた国フェスは、15件中8件であっ

表3 出店ブースの言語関連活動

ID	フェス名	HP	言語関連活動	活動主体
1	日韓	多	韓国語教材の割引販売	出版社
			—	
3	カンボジア	多	日本語教材販売・日本語教育実績の紹介	人材育成 NPO
			教育普及・識字率向上のための寄付・バザー・活動報告	カンボジアで活動する財団
			クメール文字体験	カンボジアで活動する NGO (衛生)
4	ベトナム (東京)	多	ベトナム語放送公開収録	ラジオ局
			ベトナム語講座	日越友好協会
			留学生受け入れプログラム紹介	日本の教育機関・語学学校
			ベトナム語講座	在日ベトナム人向け生活相談
13	アイルランド	多	語学留学(英語)パンフレット配布	アイルランドの教育機関
			—	
14	ラオス	(多)	教育普及のための寄付・バザー	神奈川県内の大学
			識字率向上のためのバザー・活動報告	ラオスで活動する NGO
			ラオス語会話一覧掲示	東京都内の高校



東京周辺の国フェスにおける言語政策的営為のエスノグラフィー

2	ミャンマー	単	ビルマ語体験レッスン 日本語→ビルマ語翻訳本販売 識字率向上・教育普及のための 寄付・バザー・活動報告・交流 ビルマ語教室入会特典配布	ビルマ語教室 ミャンマーの教育機関 ミャンマーで活動する NGO ビルマ語教室
			ビルマ語会話集配布 ビルマ語使用(挨拶)で割り引き	実行委員会 日本のレストラン
7	台湾	単	花文字実演販売 中国語会話教室受付 語学留学(中国語)パンフレット 配布	占い店 東京都内の民族学校 台湾の大学・教育機関
			中国語講座 Tシャツ・雑貨記載の台湾語解説 中国語でゲーム	同郷人コミュニティ 雑貨店 東京都内の大学・台湾人留学生
12	ベトナム (神奈川)	単	—	
			ベトナム語講座 日本語スピーチ大会	実行委員会 実行委員会

\* HP 欄には表 2 にまとめた多言語ページの有無を記載。14 ラオスフェスティバルは日英のため括弧で区別した。

\*\* 言語関連活動の上段は日常業務をそのまま持ち込んでいる言語活動，下段はフェス限定の言語活動。

\*\*\* 語学講座とレッスンは前者を文字や文法など言語の説明を含むもの，後者は表現を練習する活動として区別した。

た。前節で見たホームページの多言語設定と，ブースにおける言関連語活動の間に関連する傾向は見出されなかった。言語関連活動ブースが確認されなかった国フェスを見てみると，テーマに特化したフェスティバル（たとえば，音楽：ジャマイカ，食べ物：ペルー，貿易：ブラジル）や，地域を広範に設定している国フェス（アフリカ，アラビア）の場合，英語が国フェスの言語となっているものの英語国と認識されているわけではない国の場合（インド）といった特徴が見出される。

表 3 (右 2 列) は言語関連活動の主体が，日頃からその言語関連活動事業に従事しているか否かで上下段に分けて整理した。日常的に言語関連活動を展開し

ている組織（たとえば日本国内の民族学校や語学学校、エスニックメディア、外国語書籍出版・販売店など）が国フェスに参加し、日頃の活動紹介をすることは自然なことに見える。一方で、国フェスでは、日頃は別の活動をしている組織や団体が、国フェスの時だけ言語関連活動を展開する様子が少なからず確認された。代表的な例として、実行委員会が設置するインフォメーションブースで、当該国言語のワンポイントレッスンが行われている事例（ミャンマー祭り）などである。

件数だけで見ると、日頃から言語関連活動に従事する団体が16件、そうではない団体の活動が10件と、後者の方が少ない。しかし、前者には日頃の事業を紹介するのにとどまっているものも含まれている。特に、当該国での教育普及や識字支援に携わっているNGOは、国フェスを活動報告の場としている団体が少なくない。そのため、フェス場で体験できる言語活動という意味では、両者が等しく貢献していると言ってよいだろう。

ここで、日常的には言語関連事業を展開していない団体が、言語関連の活動を国フェスで展開することの意味について、さらに深く考えていきたい。日常的には言語関連活動に従事していない組織や団体が、国フェスに限って語学講座やレッスンを実施するというブースがいくつか見られた。レッスン形式は取らなくても、会話のやりとり例を配布したり、掲示したりして、買い物の際などに使ってみることを促すといった活動も見られた。これらの例は、国フェスにおいて、当該国の言語が文化資本となっていることを示している。その実践では、日頃は補佐的な業務に就いていたり、若手の在日外国人が、先生の役割を担っているという姿も認められた。その場限りとは言え、日頃の上司と部下の関係性が逆転している様子も見られた。

一方で、語学講座やレッスンを展開するブースでも、30分から1時間程度で完結させなくてはならないといった制約も手伝ってか、国フェス内ですぐには使える単語や文章の紹介、解説、練習などが盛り込まれる傾向が認められた。語学学習の場面で、入門と言えは発音や挨拶、自己紹介などが中心になるであろう。国フェスという場で語学体験を展開する場合、教室と祭りという異なる社

会領域が混じり合ったところでの実践となる。そこでの内容が、国フェスの場ですぐに使える表現として、料理名や物品の語彙、買い物時のやりとりとなることは、当然の成り行きにも見える。教育機関の国フェスでの実践例は、全体から見ると規模の小さい実践とはいえ、文化イメージを産出する Mediascape と、教育を支える Ideoscape が交渉したり、接合したりする場 (Appadurai 1990) となっている様相も確認される。あるいは、教育の娯楽化 (Urry 1990) という観点からも接近できよう。

ここまで、当該国で言語支援活動を展開する団体は言語関連活動と言っても、日頃の活動報告に終始する傾向にあること、日頃は言語関連活動に従事しない団体であっても国フェスでは言語関連活動に取り組み、参加者がその国の言語を体験する場を提供することができること、言語関連活動の実践では日本に暮らす当該国出身者が先導するため、日常のホスト-ゲスト関係が逆転する場を創出する余地があること、国フェス内での語学体験は時間的な制約や、その場で使えることを重視するために買い物時のやりとりが取り上げられる傾向にあることを指摘した。第二点目と第三点目は国フェスの言語関連活動の可能性と言え、第一点目と第四点目は課題と言える。可能性の面を駆使しながら、課題面を克服することにつながる事例が見出されたので紹介したい。以下は、カンボジアフェスティバルで、開発途上地域で衛生面の支援を行っている NGO のブースについてのフィールドノートである。

ブース内には NGO 活動の様子が写真と文章で解説が貼られている。そのテント内で取り組まれているのは、活動紹介ではなく、クメール文字の手ほどきである。先生役の人が、クメール語のアルファベットを、ボードを用いて説明し、参加者は自分の名前をクメール文字に置き換えてみる。先生が確認をして、良ければ練習に入る。先生はひとりひとり、文字の形などについて修正し、参加者は各自、練習を重ねる。最後に 2 枚のカードに好きな色のマーカーで清書をする。1 枚は記念として持ち帰ることができ、もう 1 枚は NGO が活動している地域の子供達に届けるという。現地の子供達への応援メッセージ、友好のメッセージとなるとのことであった。終了後に先生役の人に話を聞くと、彼はカンボジア人留学生だという。普

段は工学系の学生で、この NGO の活動にも、NGO が活動している地域とも接点はないと言う。ただ、日本人がカンボジア人のために支援活動をしているということを知り、日本に暮らすカンボジア人として何か役に立てることはないかと申し出て、お祭りの時だけ、ボランティアとして先生役を引き受けているとのことだ。(2017年5月3日)

この NGO では一見すると、活動内容とは関係のないクメール文字教室が実施されている。最終的には現地の子どもの友好・応援のメッセージになるということだから、まるきり無関係ではないが、直接的と言うよりは迂回した関係性がデザインされている。

この取り組み事例で注目すべき点は、参加者の関心の惹き付け方が他の多くの支援団体とは異なる点である。国フェスには国際協力や支援活動に携わる NGO の出店は少なくない。彼らの国フェスでの活動は、日頃の支援活動内容を紹介し、現状について理解を促しつつ、募金やボランティア募集をするというのが一般的である。彼らの日ごとの活動は当該国にあるので、国フェス場に持ち込むのは写真や報告書という形にならざるを得ないのは頷ける。ただし、彼らが紹介するのは、その国が抱える貧困や社会問題、すなわち負の部分とならざるを得ない。一方で、美味しいものを食べ、ほろ酔いで陽気に騒ぐ集団がいたり、民族衣装を身にまとった人々が華麗に踊るといった国フェスで前景化されがちな場面とは乖離も認められる(猿橋・岡部 2017)。チャリティイベントと考えれば不自然ではないのだが、祭りが盛り上がるにつれ、その国の負の実態や課題の面を知る、学ぶという空間に戸惑いのような感覚を覚える参加者も少なくないだろう。

ところが、この取り組みでは、国フェスという場において、その国が抱えている問題を直接的に伝えるのではなく、まずその国に関連するモノ・コトに触れてもらい、そのきっかけを通して、NGO が展開する活動に興味を持ってもらう、というように来場者に選択する道を開いている。こうした迂回路の設定が、祭りという華やかな場で、社会問題や支援活動実績を伝える緩衝となっていることが窺える。

さらに注目したいことは、こうした迂回路あるいは緩衝点の設定において、文字や言語関連活動が展開されている点である。文化資本としての当該国言語の存在と可能性が確認できる。国フェスにおける言語関連活動は、今のところ経験的・直観的に採用されている段階であり、まとまりや全体的な方針は見えない。今後、国フェスの場において、より計画的・積極的に活用する余地があると言えよう。

## 8. 考察

本論では、国フェスに見られる言語政策的営為を横断的に見ることを試みた。フィールドワークを通して言語政策的営為の5領域、すなわち①公式ホームページの言語選択・言語設定、②企画・運営段階で重視・尊重される言語能力、③舞台上での言語選択、通訳の配置などの言語管理、④出店ブースでの言語関連活動、⑤国フェス全体の言語景観を導出した。本論では、①と④に注目してデータ整理と事例の紹介および分析を行った。以下、得られた知見をもとに考察を深める。

公式ホームページの言語選択・言語設定を見ると、言語別にページを設定している国フェスが過半を占めていた。内容を見ると情報量に差があるサイトも少なくないが、ホームページの設計時には少なくとも複数の言語を対等に位置づけていた姿勢が窺える。言語別の設定をしていない国フェスのホームページでも複数の言語の併記や、対象とする国の言語の装飾的な使用などが認められた。ひとつのページに複数言語を併存させているような場合、常に記載順序を守って併記するバイリンガル型もあれば、複数の言語がひしめきあうようなデザインとなっているものも見出された。後者はトランスランゲージング実践に近い言語使用と言えよう。また、言語情報をほとんど掲載せず画像をふんだんに使用するホームページや、ホームページとSNSで異なる言語が使用されている事例なども見られた。デジタルフェス場の多言語使用については、言語設定に加え、情報量、言語併用のあり方、非言語情報への依存度、デジタルメディアの種類などの観点も踏まえて見ていく余地があることが確認された。

出店ブースの言語関連活動からは、日常的に言語関連の活動をしていない団体であっても、当該国の言語が文化資本として活用されていることが確認された。当該国の言語は、それぞれの言語話者間のコミュニケーションを成り立たせるということだけではなく、その国らしさを演出したり、一見、祭りとは調和しそうでない活動内容を緩衝する役割を担うこともあった。

これらの二領域の分析を通して、言語政策的展開の可能性と課題を論じる。ホームページの最上部に設けられた言語切り替えのアイコンは、国フェスの主催者が当該国の言語と開催国の言語の2つの言語空間を想定していることの現れと言えよう。しかし、実際には多言語のページが等しく稼働している国フェスは限られていた。また多言語ホームページの設定と、言語関連活動を展開するブースの有無の間にも関連が見出されなかった。ホームページ上の言語設定を理念の表れとみるならば、理想と実践のズレが存在すると考えられよう。

Fettes (1997) は理想や合理性に基づいて計画された言語計画が、実践を通して見出だされる不具合を振り返り、見直していく循環を作り出すことで言語政策としての存在意義を高めると指摘する。国フェスはどのような言語空間を作り出したいのか、あるいはイメージする国フェスを演出する上で、いかに言語を活用するのか、しないのかを検討する余地がそれぞれの国フェスにある。

全体に浸透させるような言語政策は不在であり、個々の参加者の工夫に基づいた多彩な言語関連活動が見出されたが、その一方で、国家を象徴するひとつの言語に収斂される傾向も認められる。これは、ホームページで複数の言語が準備される場合であっても、日本語と当該国を代表するひとつの言語が選択されること、その言語が国旗で示されること、その言語が英語であり、なおかつ英語国とは言えない国の国フェスには言語関連活動が取り組まれにくいこととも関連していよう。国家と言語が対になって提示され、その言語はその国を独自に象徴する役割が付与されているのである。この点は、その他の言語についての取り組みや関心が皆無であるということの意味してはいない。国フェスの会場を丹念に見ていくと、少数民族文化グループの参加、手話学校、アイルランド語がプリントされたTシャツの販売などが確認された。しかし、彼らは彼

らの言語を資源として活用してはいなかった。

この点から、国フェスの言語政策的展開には可能性に加え、以下の課題も見出される。国フェスには理念に基づいた言語政策的展開の可能性を検討する余地があるが、それが硬直的なものになってしまうと個々の工夫に基づいた活動が抑制される危険性も考えられる。祭りの場は日常の規範からの逸脱や、試行的な実践も許される場であり、それが国フェスの面白さや活力でもある。個々の言語関連活動を支援したり、つなぐような発想で国フェスの言語政策を展開する余地があろう。さらに、その国を代表するひとつの言語に収束する流れに対しては、自覚的に見直す余地がある。当該国を代表する言語はもとより、少数言語や近隣国の言語、手話も国フェスを彩り豊かな場にする文化資本としての可能性を秘めている。国フェスの言語政策研究上の展開としては、規模が小さくても、言語間の力関係を是正するような取り組みを見出し、光をあてていく可能性も備えている。

## 9. おわりに

本論では、15種類の国フェスで21回にわたるエスノグラフィックなフィールドワーク調査を通して、言語政策的営為を描出することを試みた。

明文化された言語政策を持っている国フェスは今のところない。ここに記述した言語政策的営為のほとんどは実践者の中で経験的に蓄積、調整されており、包括的に把握されるには至っていない。それが、その場に応じた自由な言語の選択や調整を可能にしている面もある。一方で、当初描いていた当該国言語を活用する場を縮小させてしまったり、暗黙のうちに少数言語に関連する活動に制約をかけてしまっている可能性もあろう。多言語化する公共空間で、どのような言語政策的な課題が内包されており、課題を乗り越えるきっかけがどこにあるかを見出す上でも、国フェスのような空間で、どのような言語政策的営為が展開されているかを見ていく意義があると言えよう。

国フェスはまだ蓄積も浅く、その存在基盤も必ずしも堅固とは言えないものもある。運営主体が入れ替わり、目的や手続きが大きく変更になったり、継続

すら危ぶまれている国フェスもある。そのため、その場で得られた知見を一般化することは難しい。しかし、そのような環境下であるがゆえに、その場で生み出される人々の相互協力や即興的な課題対処も確認される。そこから、グローバル公共空間の秩序形成について、示唆が得られることが予見される。方法論上の課題も残されているが、国内外で開催される国フェス実践場において参与観察者として関わり続けることで、ひとつひとつの課題に丁寧に向き合い、ひとつずつ乗り越えていきたい。

### 引用文献

- Anholt, Simon (2007). *Competitive identity: The new brand management for nations, cities and regions*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Aronczyk, Melissa (2008) “Living the brand”: Nationality, globality, and the identity strategies of nation branding consultants. *International Journal of Communication*, 2, 41–65.
- Appadurai, Arjun (1990). Disjuncture and difference in the global cultural economy. *Theory, Culture, and Society* 7 (2–3), 295–310.
- Bennett, Andy, Taylor, Jodie & Woodward, Ian. (Eds.) (2014). *The festivalization of culture*. Oxon: Routledge.
- Bhaba, Homi (1994). *The location of culture*. London: Routledge.
- Blommaert, Jan (2010). *The sociolinguistics of globalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bourdieu, Pierre (1986). The forms of Capital. In Richardson John G. (Ed.) *Handbook of theory and research for the sociology of education*, pp. 46–58. Connecticut: Greenwood Press.
- 茶谷幸治 (2003). イベント化社会——実践的イベント論序説 関西学院大学出版会
- Cooper, Robert L. (1989). *Language planning and social change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fettes, Mark (1997). Language planning and education. In Wodak, Ruth & Corson, David (Eds.) *Encyclopedia of language and education: Language policy and political issues in education*, pp. 13–22. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Garcia, Ofelia & Li, Wei (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. London: Palgrave Macmillan.
- Goldstein-Gidoni, Ofra (2005). The production and consumption of ‘Japanese Culture’ in the global cultural market. *Journal of Consumer Culture*. 5 (2), 155–179.
- Hult, Francis M. & Johnson, David. C. (2015) Introduction: the practice of language policy research. In Hult, Francis M. & Johnson, David C. (Eds.) *Research methods in language policy and planning: A practical guide*, pp. 1–5. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- 飯田剛史 (2002). 在日コリアンの宗教と祭り——民族と宗教の社会学 世界思想社



- Inda, Jonathan. X., & Rosald, Renato (Eds.) (2008). *The anthropology of globalization* (2nd edn), Oxford: Blackwell.
- Johnson, David C. (2013). *Language policy*. NY: Palgrave Macmillan.
- McDermott, Phillip (2012). Cohesion, sharing and integration? Migrant language and cultural spaces in Northern Ireland's urban environment. *Current Issues in Language Planning*, 13 (3), 187–205.
- 永井純一 (2016). ロックフェスの社会学——個人化社会における祝祭をめぐって ミネルヴァ書房
- 内閣府知的財産戦略推進事務局 (2018) クールジャパン戦略について 平成 30 年 4 月  
〈[http://www.cao.go.jp/cool\\_japan/about/pdf/cj\\_initiative.pdf](http://www.cao.go.jp/cool_japan/about/pdf/cj_initiative.pdf)〉 (2018 年 8 月 30 日)
- Nye Jr., Joseph S. (2004). *Soft power: The means to success in world politics*. New York, NY: Public Affairs.
- Park, Gilbert, C. (2011). “Are we real Americans?”: Cultural production of forever foreigners at a diversity event. *Education and Urban Society* 43 (4) 451–467.
- Pietikainen, Sari & Kelly-Holmes, Helen (2011). The local political economy of languages in a Sami tourism destination: Authenticity and mobility in the labelling of souvenirs. *Journal of Sociolinguistics*, 15 (3), 323–346.
- Rubdy, Rani & Alsagoff, Lubna (2014). *The global-local interface and hybridity*. Bristol: Multilingual Matters.
- 佐藤郁哉 (2006). フィールドワーク増訂版——書を持って街へ出よう 新曜社
- 猿橋順子 (2016). 移民コミュニティの祭りと「異国フェス」——聖なる対象としての民族・国家 青山国際政経論集 97: 59–78.
- 猿橋順子 (2017). 異国フェスの言語政策論的分析——台湾フェスタのステージトークを事例として 青山国際政経論集 98: 53–77.
- 猿橋順子 (2018). 国フェスの今日の特徴——エスノグラフィックなフィールド調査からの分析 青山国際政経論集 101: 89–106.
- 猿橋順子・岡部大祐 (2017). 国フェスに見るディスコースの共有と転換——ミャンマー祭りを事例として 多文化関係学 14: 3–21.
- Scollon, Ron, & Scollon, Suzie W. (2003). *Discourses in place: Language in the material world*. Oxon: Routledge.
- Spolsky, Bernard (2009). *Language management*. New York: Cambridge University Press..
- Spolsky, Bernard (2012). What is language policy? In Spolsky, Bernard (Ed.) *The Cambridge handbook of language policy*, pp. 3–15. New York: Cambridge University Press..
- Urry, John (1990). *The tourist gaze.: Leisure and travel in contemporary societies*. London: Sage.
- Vertovec, Steven (2007). Super-diversity and its implications. *Ethnic and Racial Studies*, 30 (6), 1024–1054.
- Wright, Sue (2016). *Language policy and language planning: From nationalism to globalization*. Palgrave Macmillan